



TITLE:

<大會抄録>朱全忠政權の成立

AUTHOR(S):

大澤, 正昭

CITATION:

大澤, 正昭. <大會抄録>朱全忠政權の成立. 東洋史研究 1974, 33(3): 520-520

ISSUE DATE:

1974-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153554>

RIGHT:

大會抄錄

朱全忠政權の成立

大澤 正昭

唐末・五代の藩鎮割據體制の展開から再統一へ向かう過程に於いて、唐朝を打倒して樹立された最初の政權は朱全忠政權である。この新政權は、周知の通り、生産力の顯著な發展によりその經濟的地位を確立した江南ではなく、河南地域に直接的基盤を置いて成立した。そしてこの基盤は中國の再統一を達成した宋朝へ繼承されたと考えられる。このような、統一政權を生み出した河南地域の歴史の優位性是如何なるものとして把握するべきであろうか。いくつかの側面からの検討がなされねばならないが、その中の二、三の點について考察を加えたい。

安史の亂以後、朱全忠政權成立までの河南地域に特徴的な側面は、一つに、貨幣經濟の一層の浸透であり、また一つには、それと切り離して考えることのできない「驕兵」の問題である。即ち、安史の亂による農村の破壊は舊來の農村經濟體制の崩壊を一段と早めていたし、江淮漕運路に象徴される河南の經濟的位置は貨幣經濟の浸透を必然的にしていた。この結果、唐末を通じて、兵農分離と商業資本の展開が他地域に比してより推進されたと考えられる。これが宣武軍等の「驕兵」を支える基盤ともなっていたし、朱全忠政權の基礎となっていた商業資本の質をも規定していたのである。ま

た、李克用等の諸集團に先んじて「統一」政權を作りあげた要因ともなっていたと考えられるのである。

二十世紀中國の一棉作農村における

農民層分解について

吉田 流一

第一次大戰後の天津における民族紡績工業の發展と棉花輸出の増大による原棉需要の高まりは、華北農村における棉花栽培の普及を推し進める原動力となった。後進的な華北農村が世界市場に組み込まれていったことが、農民生活に如何なる影響を與えたのか、より一般的にいえば、半植民地半封建的といわれる中國農村經濟とは如何なる構造をもつものであったかを明らかにすることは、今日依然として重要な研究テーマである。中國革命の原動力である中國農民の革命性について語られることは多いけれども、二十世紀の農民生活——特にその土臺である經濟生活についての具體的實證的な研究は、意外に立ち遅れているのではないかと思われるからである。

ここでは、河北省東北河棉産區の中心に位置する豐潤縣米廠村において、陸地棉の栽培が農村經濟の動向に與えた影響を、以下の順序で考察したい。

(一) 全村がほぼ棉作專業農家へ轉化した米廠村では、競争の原理が貫徹し、經營規模較差・生産力較差が一部の上層農民を押し上げて富農に轉化し、他方大多數の零細農民をますます貧困化させてい